

滋賀県文化審議会 第32回会議 会議録

- ◆ 日 時 : 令和6年(2024年)2月6日(火) 10:30-12:00
- ◆ 開催場所 : 滋賀県危機管理センター1階 会議室3、4(大津市京町四丁目1-1)
- ◆ 出席者 : **【委員】**
 片山 委員(会長)、岡田 委員(会長代理)、磯崎 委員、井上 委員、上田 委員、
 奥村 委員、川戸 委員、北村 委員、小林 委員、杉江 委員、寺嶋 委員、林 委員、
 南 委員、三宅 委員、若林 委員(15名中15名出席)
【事務局】
 谷口 文化スポーツ部長、保坂 県立美術館長(ディレクター)、
 萩原 文化芸術振興課長、木村 県立美術館副館長、
 辻 文化芸術振興課美の魅力発信推進室長、松下 文化財保護課課長補佐 ほか
- ◆ 議 題 : (1) 滋賀県文化振興基本方針(第3次)進捗状況について(中間報告)
 (2) 重点検討事項「文化芸術関係者の持続的な活動に向けた支援のあり方
 について」
 (3) 滋賀県障害者文化芸術活動推進計画(第2次)(案)について(報告)
 (4) 美の魅力発信プラン中間見直し(案)について(報告)
 (5) 令和5年度特別史跡安土城跡発掘調査について(報告)

◆ 発言内容 :

発 言 者	発 言 内 容
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ■ 開会 挨拶
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ■ 委員紹介および会議成立の確認 ■ 事務局出席者の紹介・配布資料の確認・諸連絡
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ■ (1) 滋賀県文化振興基本方針(第3次)進捗状況について(中間報告) <p>資料1-1、資料1-2にて説明。</p>
井上委員	<p>・資料1-2の10ページ問8について、結果としては「きっかけがないため」、「自信がないため」が高い割合となっているが、これまでは文化施設や公民館などで社会教育活動を実施し、そこから文化団体が結成され、文化協会に加入するという流れがあり、市町はそれらに補助を行うことで文化振興につなげるというフレームがあった。現在は、社会教育活動の所掌が教育委員会からまちづくり関係の市長部局に移管されることが多く、社会教育活動の実施が難しくなっている。また文化団体の構成員が高齢化している中で、市町はどのように文化振興を行えばよいか考えているところであるが、県として市町の状況に対する考えや取組に対する分析など何かあれば教えてほしい。</p>
事務局	<p>・県では昨年、市町の職員を対象に県の施策を紹介し、市町職員が文化振興に関</p>

発 言 者	発 言 内 容
	<p>わっていただけるように研修会を開催した。また、障害者の文化芸術活動という分野に限れば、市町の文化施設と協力して共生社会づくりに向けた取組を実施している。市町では文化施設が主な文化拠点となっていると思われるので、当該施設の担当者が参加している県公立文化施設協議会で研修等を実施している。</p>
井上委員	<p>・今は文化振興のための裾野が狭くなっているように感じる。裾野を広げ、文化振興に興味のある人を増やすためにも、市町と協力して進めていただきたい。</p>
小林委員	<p>・今後文化の裾野を広げていくうえで、社会教育活動の位置付けは重要であるが、事業を実施する側の視野が狭くなっていないか気になった。今でも公民館活動が活発に行われている地域があり、そのような事例を参考にしつつ、視野を広げた人材育成や施策を推進いただきたい。</p>
寺嶋委員	<p>・資料1-2の間8について、「きっかけがないため」や「時間的余裕がないため」の割合は増えている。コロナ禍が明けて、活動できるようになったが逆にきっかけや時間がないことを表しており、タイムラグが見られる。このタイムラグに対応した施策展開が遅れているため、これらの項目が上昇したのではないかと思う。傾向として注目すべき点ではないかと思う。</p>
川戸委員	<p>・コロナ禍から回復傾向にあるのは、観光・物産事業者も同様である。コロナ禍でも積極的にできることに取り組んだ事業者の回復は早く、コロナ禍が終わったら何とかなるといった考え方の事業者は回復が伸び悩んでいることが、観光・物産事業者向けのアンケート結果で出ている。コロナ禍では、依存性を高めるような施策がこの4年間実施されてきたため、文化芸術活動の分野でも、オンライン公演などで活動している団体はコロナ禍前に回復しているが、そういった活動をしなかった団体は他団体との関係性も希薄となり、回復には時間がかかると考えられる。そういった団体も残さずに回復できるように、アンケート結果を深掘りする必要はないが、回答者の気持ちがこれまでと異なることを念頭に分析しなければ、施策の方向性を見誤る可能性もあるが、県としての認識はいかがか。</p>
事務局	<p>・御指摘のとおり、アンケート結果については回答された方の気持ちや傾向も踏まえて把握する必要がある。次の議題でも出てくるが、取り残された方に関しては、アンケート結果でネットワークづくりが不足していたり、関係性が希薄になっていたりしていることがあった。具体的には次の重点検討事項でお話しさせていただきます。</p>

発言者	発言内容
川戸委員	<p>・観光・物産振興と文化振興は両輪のような関係で共に歩んでいきたいと思うので、指摘の点も踏まえ伴走して行ってほしい。</p>
北村委員	<p>・資料1-2の間2について、「他の用事（仕事や旅行など）のついでに立ち寄る機会があったため」が他の項目よりは低い割合ではあるが、劇場など鑑賞のために出向くのではなく、偶然買い物のついでなどで街に出たときに機会があったという数値が、個人的な印象ではあるが、大きいと感じた。推測ではあるが、コロナ禍以降、文化芸術の鑑賞、活動の再開にハードルを感じている方にとっては、施設に来てもらうことも重要だが、県民の方が暮らしている身近な生活の場に文化芸術の鑑賞、活動の機会を設けるような取組も、今は必要ではないかと感じた。</p>
片山会長	<p>・井上委員や小林委員から指摘があった、基礎自治体においては教育委員会がこれまで中心となって文化振興を担ってきたが、そのあり方が変わってきている。文化芸術基本法の改正以降、学校教育における芸術教育の基準を文化庁が担うことや、学校教育における部活動の地域移行などの様々なことが変化している中で、旧来型の文化協会を通じた文化振興というやり方が時代に合わなくなっている。一方で、教育委員会は社会教育主事等の専門性を持った方の合議制の組織であり、新たなあり方を考えていく必要があるかもしれない。県としても縦割りになりがちな点であるが、うまく連携してこれまでの文化振興を期待したい。</p> <p>■（2）重点検討事項「文化芸術関係者の持続的な活動に向けた支援のあり方について」</p>
事務局	<p>資料2-1、資料2-2にて説明。</p>
上田委員	<p>・文化芸術に関わる人、場所、資金、補助金などの情報を集約・整理されシェアできるプラットフォームは重要で、可能であれば必要な先とマッチングしてもらえそうなものが望ましい。NPO団体では淡海ネットワークセンターのような中間支援的な役割、場所、組織は大事である。同時にそこに配置されるコーディネーターの存在が非常に重要になる。今回の場合は、アートコーディネーターがそれにあたると思うが、コーディネーターの育成や確保の状況、今後の方向性など、人物像や配置の課題について聞かせていただきたい。</p> <p>・県立大学の地域共生センターでは、年間200件近くの相談が地域から入る。それを適切に処理してつなぐには相当人材の能力が必要。アートコーディネーターがどのような様子か知りたい。</p>

発言者	発言内容
事務局	<p>・現時点で明確なコーディネーター像はない。本審議会の御意見をお伺いしつつ検討してまいりたいと思うが、滋賀県の文化芸術振興ということで、地域に密着したという点は重要と考えている。例えば、首都圏在住の方に勤務日だけ来ていただくといった形は想定しておらず、地域に密着して地道な活動をしていただけるような方をイメージしている。</p>
南委員	<p>・人材に関して、私が講師をしている相愛大学にもアートプロデュース専攻があるが、在校生に聞くと、卒業後の進路として文化ホールが新卒採用を行っておらず、異なる職種に就く学生がいる。経験を積んだ方が望ましいが、人材を育成するという観点から、インターンシップ制度を活用して、若い人材にプロデュースの手法を教え、育てていただきたい。個人的な希望としては、文化施設ごとに1人ずつ事務とアートプロデュースを兼務する若い方を雇っていただきたい。その後施設間のつながりのため講習会を実施するなどの横のつながりを強化し育てていくことが望ましい。現在、多くの大学でアートコーディネーターの学部を設けている中で、ホールに就職できていない現状に鑑みてもよいと思う。</p>
井上委員	<p>・今の南委員の御意見に関して、市町のホールはほとんどが指定管理者制度の中で運営されていることが多く、即戦力の方を入れないと業務が回らないことが多い。もし、御指摘のような育成が必要であれば、そういった方を採用しなければ損をする、または採用すると利益がある、といった何らかのインセンティブが働くような形がなければ、市町で育成しつつ運営するという事は難しい状況である。</p>
磯崎委員	<p>・アート支援の実施のスケジュール感は。</p>
事務局	<p>・来年度からの実施を考えている。本来であればこの審議会で御議論いただいてから検討し内容を詰めてから予算を要求する、というところであるが、県の予算要求の都合上、事務局において審議会での相談窓口の御意見や他の自治体への視察等を踏まえて、まずはやってみようという考えで来年度としている。</p>
磯崎委員	<p>・重点検討事項が立ち上がって2年が経過しており、「きっかけづくり」の機会を逃している。県政モニターアンケート調査でも「場を作る」の割合が下がっていることをこれまでの審議会で指摘しており、「文化芸術に取り組むことができる環境が整っていると思う県民の割合」も下がっていることから、滋賀県で文化芸</p>

発言者	発言内容
片山会長	<p>術活動を行う環境が整っていないことが分かる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アーツカウンシル滋賀版を急ぎ整えて、早急に育成していただきたい。SAN P O h（滋賀で人と社会と文化芸術をつなぐプロジェクト）の取組ではネットワーク構築の取組が実施されたが続いておらず、再度始めるには時間がかかる。とにかくはじめる、という姿勢は大事だが、施策を進めながら文化審議会において随時審議して素晴らしいものにしていきたいと思うので、時間が勝負である。 ・事務局は議会の予算要求の関係もあり、はっきりと答えにくいところもあるが、審議会の議論も踏まえ、予算を一定確保し、アートコーディネーターを採用できる予算がつく見込みで議論している。来年度予算が確保されるか未定であるが、その予算を確保した場合に、どういう人を雇ったらよいかという人材の中身、どこで活躍いただくのかの場所をどこに置くかという人材の配置が検討すべき課題である。 ・アーツカウンシルは、様々な自治体で作られているが、大阪市では審議会の部会として置いているほか、財団などの外郭団体、松山市では愛媛大学に置く、文化施設に置くなど手法も様々である中で、滋賀県の特徴からどの場所にどういう人を置くのが効果的かご提案いただくと、実際に予算が確定し、執行する段階で制度設計に反映できるため、御意見を広くいただきたい。
岡田副会長	<ul style="list-style-type: none"> ・美術系、美術やデザインの分野の立場から発言する。資料2の対象者（文化芸術関係者）について、美術系の分野にあてはめて考えると、美術分野の仕事で生計を立てている方が該当する。そういった方で滋賀県に在住されている方は、活動範囲が滋賀県に限っていることはまずなく、全国的に活動されている。 ・いわゆるプロを支援することを想定しているのか。アートコーディネーターの支援内容について地域密着型という発言があったが、対象者に対して、地域密着型であるアートコーディネーターをつけることの意義が不明瞭であり、またどのようにアートコーディネーターが活動を支援するのか不明瞭である。 ・分野によって活動の状況は大きく異なり、造形系の分野はこのような状況であるので、分野ごとに考えていかないと実態と乖離してしまう恐れがある。議論の出発点はこれでよいが、もう少し詳細に内容を検討していただいてそれから来年度のことであれば落とし込んでいく必要があり、スケジュールがひっ迫している。
片山会長	<ul style="list-style-type: none"> ・サプライサイド（アートコーディネーター）に寄り添うのか、ダイヤモンドサイド（文化芸術関係者）に寄り添うのか、明確にしていかないと議論が混乱するかもしれない。アーティストに寄り添い、活動場所を問わないのであれば、滋賀県

発言者	発言内容
	<p>をベースに活動しているアーティストを対象にすればよい。そのため、補助金に関しても、全て滋賀県が用意するのではなく、国の補助金を紹介してあげることがを想定している。県民の文化振興につながるものに関しては、県が補助金を用意することも考えられる。</p>
奥村委員	<p>・ 県政モニターアンケート調査で、劇場に足を運ぶ人がコロナ禍で行かない要因は半減している一方で「興味のある催し物がないため」が最も高くなっており、観客を呼びよせる内容になっているのか、量と質を並行して考えていくべきだと思う。</p>
若林委員	<p>・ コーディネーターに関しては、「地域創造」が地域と文化・芸術をつなげるコーディネーターの重要性に注目して、令和3年度に調査研究を行った。アートコーディネーターの定義や汎用性のあるコーディネートモデルの構築は困難だが、先進事例のインタビュー内容をまとめた調査報告書があるので、ご参照いただきたい。</p> <p>・ アーツカウンシル情報として、3月17日の日本文化政策学会企画フォーラムで、全国の地域アーツカウンシルのメンバーが集まり、現状や課題を議論する。今後導入を考えている場合は何かヒントがあるかもしれない。</p> <p>・ コーディネーターは相談対応することで自身も経験が蓄積されていくので、継続が大事である。継続して配置するための予算確保や、雇用口の確保、適切な配置場所について、議論を尽くして運用していただきたい。</p>
片山会長	<p>・ 岡田副会長からビジュアルアーティストの場合は、状況が異なるといった話があった。私自身、浜松市のアートセンターの運営に携わっているが、ビジュアルアーティストはアートセンターといった文化施設に相談に来られる傾向が強い。浜松市は文化振興財団内にアーツカウンシル組織も置いているが、文化施設に相談に来られる方が多いという印象がある。文化芸術分野によってどこに相談しやすいか、かなり異なるのかもしれない。滋賀県の場合、地理的な問題もあるかもしれないが、どのような形で作るか御意見、御議論いただけたらと思う。</p>
南委員	<p>・ びわ湖芸術文化財団や、美術なら県立美術館、北部なら文化産業交流会館。県立の南北の施設があるので、これらのところに人と仕組みを置いていただくのが良いと思う。</p>
寺嶋委員	<p>・ アートコーディネーターとは相談支援員という理解でよいと思うが、私の所属する技術士会近畿本部の技術士活性化委員会では、大阪府内の中小企業から色々</p>

発 言 者	発 言 内 容
	<p>な困りごとの相談を技術士会で受け付けており、受け付けた際に、相談事項の関連分野で登録されている専門分野の技術士の方にメールが送付される。その後、対応可能回答があった技術士と相談者の間で具体的な話や情報収集に進んでいく仕組みになっている。結果、適格な対応が可能となっている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おそらく、市町の役所ごとに相談員を置くには、多くの人員を抱える必要があり、報酬の問題など現実的には難しいだろう。前述の手法であれば、スポット的であり現実的な方法ではないかと思う。技術士の世界ではこのようなやり方があるので、ご参考にしていただければ。
磯崎委員	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の内容が固まっておらず、本日の審議時間では時間が足りない。本格的な議論を行うのであれば分科会を立てることが必要。窓口の置き方、アートコーディネーターの中身を深掘りして制度設計したうえで議論したい。
北村委員	<ul style="list-style-type: none"> ・プロのダンサー兼振付師として全国で仕事をしているが、美術分野のお話は共感できる。ダンスや舞台に立って実演するアーティストに関して言うと、音楽家の方もそうかもしれないが、劇場から直接お仕事のやり取りがある場合のほかに、中間支援団体のNPOや地元のコーディネーターの方にお世話になることが非常に多い。滋賀県には真ん中に湖がある地形をうまく活かし、東西南北にある県の文化施設をハブとして、真ん中のびわ湖ですすい泳げるようなフリーなコーディネーターを配置することや、インターンなどによって、アートコーディネーターを目指す方が大きい仕事でないかもしれないが、小さいアウトリーチで経験を積み、他方で県民の方に文化芸術に触れる機会を持ってもらうことで、文化芸術に触れる人、文化芸術を提供するコーディネーターやアーティストを育てるといふ両方を回す歯車が回ればよいと思った。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・SANPOhの関係について、来年度予算要求したものはSANPOhの流れを踏襲し参考にした上で予算要求しているものである。アーツカウンシルという言葉が出たが、組織化は最終的な視野には入るが、滋賀県で組織化が必要かどうかも含めて御議論、御検討いただきたいと思う。 ・御指摘のとおり、制度設計して議論するというお話もあったが、これまでの審議会において、実態把握を行い、そこから支援を検討することとしていた。そのため、県で制度設計をしてから審議会で御議論いただくのではなく、広く御意見を伺った上で施策に反映させていただきたいという考えであった。部会という話もあったが、こちらは事務局で検討してまいりたい。 ・コーディネーターの地域密着については、県外で活動されているアーティスト

発言者	発言内容
川戸委員	<p>もいらっしゃる一方で、そもそも県内の文化芸術関係者の実態把握ができていないという課題もある。地域密着と申し上げたのは、地域の実態を把握した上で、施策を検討するという意図があるため。コーディネーターの人材育成も含めて行っていきたいと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北村委員から指摘があった地理的な要因も踏まえ、滋賀県で何が必要なのか本日の御助言も踏まえて検討させていただきたい。 ・今の話の中で「持続的な活動」にどのような視点を持っているか気になった。資料2で挙げられている課題の4点は喫緊の課題であり対症療法のようなものと思った。「持続的な活動」という語を使うのであれば、3～5年をかけて滋賀県の文化振興が社会環境の改善や醸成につながるような視点も視野に入れながら取り組んでいただく必要がある。まずは試験的に事業を実施し、対症療法が効果を生むかはやってみないと分からないので、やってみることは大事だが、「持続的な活動」という語を使うのであれば、活動の期間を短期的なものと同期的なものに分けて考えると分かりやすいのではないかと思った。
事務局	<p>■ 議題(3) 滋賀県障害者文化芸術活動推進計画(第2次)(案)について(報告)</p> <p>議題(4) 美の魅力発信プラン中間見直し(案)について(報告)</p> <p>議題(5) 令和5年度特別史跡安土城跡発掘調査について(報告)</p> <p>資料3-1、3-2、4-1、4-2、5に基づき説明。</p>
井上委員	<ul style="list-style-type: none"> ・報告議題の審議会での扱いについて教えていただきたい。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・報告事項等は内部で検討しており、県議会等でお諮りしたり庁内で検討しているところであるが、審議会の場でも外部有識者の方からご意見をいただいて施策を検討していくものであり、御意見を踏まえて計画をたてていくもの。予算要求の際にも、いただいたご意見を参考にして施策を検討しているもの。
奥村委員	<ul style="list-style-type: none"> ・安土城のプロジェクトは面白く思っている。現地にも足を運んでいるが、近江八幡市に安土城が編成される前は無料だったのが、今は有料となっている。今は平日も他府県から見に来られる方は多いが、実際に安土城跡であることが電車からも車からも分からないのは何とかならないか。景観を損なうことはできないが、何か工夫いただけないか。 ・滋賀県レイカディア大学で地域文化学科に属していた際に、課外学習報告書で

発言者	発言内容
事務局	<p>現地に行ったり調べたりした際に、関東の方、確か神奈川県不動産業者が、安土城を模倣したものでかなり大規模なものを作られた。2つ目、3つ目のこのような模倣がでないか不安に思っている。</p> <p>・安土城跡について、あの場所が安土城だったというものが建物が無いので分かりにくいところではある。城跡という認識が浸透していないところもある。昔は看板もあったが老朽化のために撤去した。近江八幡市の方で建て替えを計画されているようである。特別史跡という場所を考えると、あまりそういうものを立ててはいけないというルールもあるので、難しいところ。今、入り口部分を整備して、石垣等が鉄道や道路からも見えるようになっているので、ある程度城跡としての認識度は高まっていくのではないかと思う。天主がいろんなところで建っているのは確かで、伊勢でも戦国時代村というものがあり、現地では建てられないが、よそでは建てても構わないというところで、そこについては、県でコントロールは難しいが、現地はしっかりと守っていく。</p>
三宅委員	<p>・資料5について、現状安土城考古博物館は、戦国プラス考古学として、滋賀の1万年を超す歴史を通史として見ることが出来る唯一の博物館と認識している。その滋賀の魅力を発信する意味での大事な考古学の資料はどこでどのように展示されるのか、みんなに見る機会があるのか、ご教示いただきたい。</p> <p>・資料3について、障害者の言葉を全て外国にルーツを持つ人と読み替えて読んでみると、外国にルーツを持つ方に対して、どういう状況なのか改めて感じるものがあつた。滋賀県は障害者の文化芸術活動というものを全国に先駆けて取り組んできたことで、豊かな滋賀の文化ができていると認識している。滋賀には多くの外国にルーツを持つ方がいるので、障害と同じようにハードルやバリアを感じている方たちの取組もまた滋賀が率先して取り組んでいていただければと要望したい。</p>
事務局	<p>・安土城考古博物館にある考古資料の取り扱いについては、リニューアルによって常設展示ではなくなるが、当面は博物館の方に展示している弥生時代の資料等と併せて企画展の機会に展示したい。本来は埋蔵文化財に関しては、県立の埋蔵文化財センターで展示するべきであり、現在、埋蔵文化財センターのあり方検討会を進める中で、埋蔵文化財資料の公開活用機能を強化する方向で考えているところ。将来的には埋蔵文化財センターで展示できることを検討している。</p>
・三宅委員	<p>・埋蔵文化財センターのあり方検討という話があつたが、埋文センターは老朽化</p>

発 言 者	発 言 内 容
事務局	<p>しており、展示スペースも1階のエントランスの一部スペースに限られている。 1万年以上の発掘資料という滋賀の考古学は発掘されているものは全国的にも注目されているので、是非いい形で検討していただければと思います。</p> <p>挨拶</p> <p>■ 閉会</p>